
最弱な勇者と最強な魔術師とヘタレな魔王

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱な勇者と最強な魔術師とヘタレな魔王

【Nコード】

N3377F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

最弱な勇者がユニークな仲間とふざけます。旅って感じでは無く日常という感じです。魔王は勇者と魔術師が好きです（LoveではなくLike）

Chapter 1 勇者（前書き）

勇者Sideです。 勇者がなぜ旅立つのか・・・

Chapter 1 勇者

「うわー！！すみません！！助けてください！！」

戦闘不能・・・

「・・・・・・・・153回目・・・・・・・・なんでボク・・・・・・・・勇者になったんだろっ」

・・・・・・・・回想・・・・・・・・

「ルイくん」

「・・・・・・・・なに？母さん」

「魔王倒して来て？」

「・・・・・・・・・・はい？」

「だから魔王倒して来て？」

「（この人何言ってるんだ？ボクなんか倒せるわけ無いよ！！）」
「行って来ないと・・・・・・・・一生家に入れないから！！」

笑顔で少年に言った。

少年は、自分の母親の黒い笑みに何も言えなくなった。
むしろ、涙ぐんでいる。

「な、なんで？」

「だって皆迷惑じゃない！！」

「そんな理由で息子を危険な目に合わせる気！？息子が可愛くないの！？」

「可愛いわよ？だけど迷惑の方が大きいし？」

ワクワクという感じに楽しんでいる。

少年・・・ルイは何も言えずに黙ってる。

それが、更にエスカレートするのを気付かなかった。

「だって一度でいいから勇者の母親になりたかったのよ！！それに
お金持ちになれるしね！！勇者って響きも素敵じゃない！！しかも、
近所の奥様に自慢出来るじゃない！！」

「・・・」

マシンガントークで自分の理想を話してる。

花が乱舞してるが呆れてるルイは見なかったふりをした。

「うう・・・」

「さあ行つてきなさい！！荷物はそこにあるわ」

「もう用意したの!？」

「今日出発してね!!」

「・・・はい」

普通は、父親が元勇者だったとか、特殊な力があるのかなのに・・・
全く無い。

父親は農家だし・・・

母親は薬売りだし・・・

「なんでボクなんだー!!」

村の入口で一人で叫んでる少年。
周りはルイに憐れみの目で見える。

これが、ボクの始まりのストーリーだった。
ボクの周りにはまともな奴はいない・・・
ってことは、ボクもまともじゃないってこと？

Chapter 1 勇者（後書き）

それぞれの心の内を最後に乗せていきます。みんなをどう思ってるか、とかも分かります。

Chapter 2 魔術師（前書き）

魔術師Sideです。なぜ彼女が旅立ったのか・・・

Chapter 2 魔術師

「・・・倒れた屍？」

・・・回想・・・

「・・・何言つてんの？バカ兄貴」

「兄貴じゃなくてお兄ちゃん！！って呼んでよユリアちゃん！！その方が萌えるから！！」

「ウザいしキモい」

「いつからそんな子に・・・俺はそんな子に育てたつもりは無いよ！！」

「アンタに育てられたつもりも無い」

「ユリアちゃん！！」

黒いローブを着た少女・・・ユリア。

一緒にいる顔だけはカッコいいお兄さんに暴言を吐いてる。

「だから！！勇者と一緒に旅をしてね・・・本当は可愛い妹を他の男と一緒に旅なんて許せないけどね・・・グスン」

「・・・なんで旅？」

「あれ？シカト？・・・流石にお兄ちゃん泣いちゃうよ？」

「勝手に泣け・・・で？」

「うう・・・実は預言なんだよ」

「・・・ふん」

「ホントは嫌なんだよ？でも、預言は逆らえないし・・・」

「・・・別に良いよ？」

「え・・・でも！！危険なんだよ！？」

「行ってくる」

荷物を持ったまま部屋を出た。

お兄さんは泣いていた。

「うわーユリアが・・・」と・・・

「・・・ごめんね兄さん・・・預言のためなら・・・命も差し出す覚悟だから・・・だって貴方は、私にとって・・・たった一人の肉親だから」

私は旅に出る。

これは決まっていたことであり、決して変えることは出来ない。
それに私の魔術に敵う奴なんて居るはず無いし！！

Chapter 2 魔術師（後書き）

最強であり最凶である彼女。彼女の暴走は勇者にしか止められない。

Chapter 3 魔王（前書き）

ヘタレ+ドMだったよ。魔王さん・・・

Chapter 3 魔王

「・・・うむ。可愛い子達だな」

見た目は美青年の銀髪の男。

ソイツは水晶玉を見ている。

そこには、黒髪の少年と少女がいた。

正確には写っていた。

少年と少女は、話しながら歩いている。

適当に出てきたモンスターを究極魔法でやりながら。

「魔王様!!」

「・・・俺さぁ・・・魔王って言葉ね、気に入って無いんだけどな」

「すみませんでした!!メル様!!」

「で・・・なんなの？」

「あ、そうでした!!魔王退治に魔術師と勇者が旅に出たとのことです」

「知ってるし・・・そんな事・・・今さらだよね」

「・・・へっ？」

「この子達ね」

「彼らを倒しに行きますか？」

「・・・手を出したら許さないよ」

「すつ、すみませんでした!!」

魔王青年・・・メルは写った二人組に頬を赤らめた。

果たしてどちらに惚れてるのだろうか。

勇者か魔術師か・・・

「いつか俺のものになるからね・・・」

妖しい笑みを浮かべてる。

「!？」

水晶に写ってる少女がメルを睨んだ。

なぜ分ったかは分らないが・・・

メルは、メルは、少女の目に怯えるどころか更に頬を赤くした。

「（ヘタレな上にドMだもんな・・・メル様）」

部下も呆れてる。

「（この人は死んでも性格は治らないだろうな。死なねーだろうけど）」と更に思ってる。

部下にまで飽きられている。

こんな上司で良いのだろうか？

早く会いたいよ。

君達に・・・

どんな子達かな？

楽しみだよ。

Chapter 3 魔王（後書き）

・・・コメント浮かばないよ。魔王がヘタレって事以外・・・もつと弄りたいな・・・

Chapter 4 出会い（前書き）

何が人気だろう？ヘタレ？ビックリしました。有り得ないほど、
た
くさんの人が見てくれて・・・

Chapter 4 出会い

「あの・・・屍じゃありません」

「戦闘不能って・・・弱っ!!」

「うう・・・無理矢理母さんが旅に出ろって言ったんだもん・・・仕方が無いじゃんか」

「もしかして・・・勇者？」

「う、うん」

「・・・雑魚」

「!？」

ルイはユリアの一言に大ダメージを受けた。

「はあ・・・私はユリア。魔術師よ」

「ボクはルイです。一応勇者です」

「同じ年でしょ？」

「はい・・・15です」

「なら敬語は止めてよ」

「は、あ、うん」

ユリアの手を掴んで立ち上がった。

余談だが、ユリアの復活魔法により、ルイが生き返ったのです。

「（163回目に話し掛けてくれた・・・数回は見ただけで何も

してくれなかった)」

泣きながら思った。

コイツは、魔王よりも魔王だと・・・

「・・・」

「どうしたの？ユリアちゃん」

「呼び捨て・・・気のせいね」

「???」

ユリアは空中を睨んでいた。

だけど、ルイが話し掛けてきたから睨むのを止めた。

「どこに行くつもり？」

「・・・」

「考えて無かったのね」

「うん・・・」

「しょうがないよね。ずっと村の入口で全滅してたんだから」

「うう・・・」

「近くに町があるから、そこに行きましょう」

「で、でも・・・」

また負ける。そんな事を考えてた。

ユリアは、そんなルイを無視して先に進んだ。

ルイは、置いてかれるのが嫌で着いて行った。

「うわゝ敵だ!!」

「下がってなさい!!ホーリーメント!!」

聖なる力で“雑魚”はやられた。

雑魚相手に、最強魔法使ったんですよ!?

ルイは「女の子に守ってもらうなんて・・・」と嘆いていた。

「ほらっ行くわよ!!ルイ」

「あ、うん!!ユリア!!」

名前を呼んでもらったのが、とても嬉しかった。
初めて女の子の名前を呼んだ。

これから、ボクは変わっていききたいな。

Chapter 5 村の異変

「・・・誰もいない？」

「ユリアが前に来た時は？」

「ここには来てないよ」

気弱な勇者と強気な魔術師が、とある村に辿り着いた。

「ヘンテコ村？」

「違うよ・・・ヘソテコだよ」

「どつちにしろ変な名前ね」

「うん・・・」

ユリアとルイは、酒場まで来た。
飲みには無く情報収集のため。

「・・・いない」

「この村・・・壊しても良いかしら？」

「ダメだよ！！」

余りのイライラにユリアは破壊宣言をした。

「・・・？」

「どうしたの？」

「草食動物の勘が・・・」

「は？」

「危険だつて！！」

「弱いからこそ身に着く能力ね」

哀れとしか思えないユリアだった。

「あ、山賊？」

「みたいね」

「ひえー！！」

「この村には人は居ねーと思ってたが・・・」

いかにも山賊です、という顔の大男が現れた。

「で・・・この村には人はいないの？」

「ああ・・・まあいいや。お前ら金目の物置いてけ」

「（こーわーいーよ！！）」

「イヤよ」

「んだとー!？」

「（すみません、すみません、すみません、すみません、すみません）」

「野郎共！！や・・・」

「・・・めんどくさい『転送』」

「なっ・・・」

山賊達はユリアの言葉で消えてしまった。

「ユリア？」

「別の惑星に消えたんじゃない？」

ルイはユリアの、どうでも良い発言に呆然として、何も話せなかった。

「・・・」

「この先に湖の国があるから」

「うん・・・行こうか」

役に立つわね。

草食動物の勘つてのは・・・

面倒事に関わりたくないし・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3377f/>

最弱な勇者と最強な魔術師とヘタレな魔王

2010年10月19日08時03分発行